山崎郷土研究会報

No. 73
1. 4. 15
兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話 62−2000

近世初頭の山崎藩（三十一）

島田　清

二、池田輝澄時代（三十）

○　山崎藩上層部の構成

山崎藩主池田輝澄は、将軍家光の従兄弟である。若いころから馬術に励み、寛永三年（一六二六）に秀忠・家光が揃って上洛し後水尾天皇の二条城行幸を迎えたときには、庭前で、騎乗を披露したほどの腕前であった。将軍家から特に目をかけられていたことは、山崎城六万八千石より、駿河府中城一八万石の城主に抜擢されようとしたことでも明らかであり、世評も、幕府が特別の庇護を加え、家格の引上げをはかっていたことを取り沙汰していたそれにもかかわらず、一転して取り潰しになるというのは、どうしたわけであろう？外様の大大名、福島正則や加藤忠広が取り潰されたのとは、根本的にちがう。

では、なにゆえの取り潰しであるか？これまでにも、いろいろ述べてきたごとく、これには、諸種の条件がかさなりあっている。過程を究明してゆくと、人の世の歩みかた、社会の仕組みとそれに対処する方法のむつかしさがよくわかり、現代社会の生活にお

目　次

① 近世初頭の山崎藩（三十一）……島田　清…1
② 戸原物語（三）……志水出世…5
③ 地名小噺……9
④ 奥の細道三〇〇年……安井清介…10
⑤ 春日神社の由来……多田嘉一…13
⑥ 石水山金蔵寺観音略縁起……藤田始男…14
⑦ 秋の研修旅行記……志水美好…15
⑧ 蔵書の紹介（三）……18
⑨ 会報三十一号〜六十号総目次……20
⑩ 史跡部だより（写真入り）……26
⑪ 役員表……28
⑫ 事務局だより……30

いても、心得ておかねばならぬこと、また、実行せねばならぬ問題などを自覚することができる。次に、この条件となったものを、まとめて考察して行こう。

まず、第一は、藩内指導層の問題である。どんな社会でも、グループには指導者がいる。いや、居なければならぬ。これによって、このグループは、まとまりをつけ、有効適切な対処を行って社会を乗りきってゆくのである。江戸時代の諸藩をみても、藩主指導型、賢臣指導型、君臣一体型、と大きく三つに分けることができる。備前岡山藩の池田光政時代は第一型の例、播磨姫路藩の河合寸翁時代は第二型の例、信州松代藩の眞田幸貫と恩田杢時代は第三型の例、といってよかろう。

山崎藩が元和元年（一六一五）成立したときの実態をながめると、まず、この点に脆弱さを感じる。いやしくも、新藩の設立である。学校創立の際に、校長の人選を厳重に行うのは、その人物の識見によって、つくられる学校の盛衰が予見されるからであるが、山崎藩の場合も、まず、この問題を取りあげる必要がある。

慶長一八年（一六一三）池田輝政が姫路城で急死し、後嗣の決定、財産の処分という重大問題が起こったとき、家康は、わざわざ幕府の要人を派遣し、輝政の遺領、播磨五二万石のうち、四二万石を嫡子利隆に相続させ、残りの一〇万石を次子忠継の所領、備前二八万石に加え、合計三八万石の大名として、両家並存の形をとらされた。忠継が家康の外孫という関係もあったからであろうが、家康の血が入っていない利隆を池田家の嫡流とするのでなく、池田家は、利隆・忠継の二家、というふうにつくりあげたのである。すなわち、両家は、本家と分家、或は、本藩と支藩という関係ではないのである。それだけに、忠継を取り巻く重臣層の形成には配意がめぐらされ、若い藩主を支える指導者層が確立された。

これと比べて、池田輝澄が山崎藩主となったときの事情は、だいぶ、ちがう。元和元年、池田忠継が急死し、続いて大坂夏の陣が起こったため、備前岡山藩は、忠継の実弟忠雄に急遽ひきつがれ、忠雄は岡山藩兵をひきつれて出陣した。戦後、忠雄は忠継の遺領を正式に引継ぎ、淡路の六万石を幕府に返上したが、このとき、忠雄は、部屋住のままでいる輝澄・政綱・輝興の三人（いずれも忠雄の同母弟）を大名として取り立てられるよう、相続した領所のうち、播磨の宍粟・赤穂・佐用の三郡を割き与えたい旨を幕府に願い出た。三人とも家康の外孫であり、忠雄の申し出も尤もなので、幕府はこれを許可し、輝澄の山崎藩が誕

楽しいくらしのお手伝い
ホームセンター
アクロ
竜野店
竜野市竜野町富永
☎(0791)63-3226(代)
営業時間AM10:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日
山崎店
宍粟郡山崎町今宿
☎(0790)62-2434(代)
営業時間AM9:00～PM7:00
(定休日) 毎週水曜日

生したわけである。ことが急速に行われ、かつ、大坂役後の混乱した時代でもあった関係上、藩の陣容、すなわち、藩内の構成が充分に配意されなかったのも、或は、已むを得なかったかも知れない。忠雄は、相続した備前藩士の中から、適切と思う人物を付けて家を分けたのであるが、それが、山崎藩の指導者層であったか、というと、必ずしもそうといえないことが、のちにわかってくる。忠雄も若年であるから、自らの手でそれを行うことはむつかしく、いきおい、忠雄を補佐していた家老たちによって行われたものであろうし、家老たちは、若い輝澄の将来を考慮して、輝澄を取り巻く重臣層の形成を、輝澄の手にゆだねる余裕を残していた、というふうにも思量される。しかし、とにもかくにも、藩主を取り巻く重臣層が、立藩当時、しっかりしていなかったことは確かなようであり、この点に、第一の問題点が認められる。

しかしながら、輝澄が賢明であり、指導力をもっておれば、それでもさしつかえない、絶えず研究し、実施後には反省を加え、一年、一年と経験をかさねて進歩をはかって行けば、それで充分だ。寛永八年（一六三一）、急出府を命ぜられて発病するまでの輝澄は、詳細なデーターを欠くけれども、一応、このような取り運びができたものとみて、さしつかえないのではないかと思う。

ところが、藩内上層部の構成は、外面のこうした動きとは、必ずしも並行していない。いな、ひじようにおもしろくない状態になって行った。その第一が、筆頭家老伊木伊織の召抱えである。すなわち、立藩後四年目の元和四年、四千石の高禄をもって、重臣最高の座に召聘された人物であるが、その経歴やその後の行動を見てゆくと、いまひとつ、器量（きりょう）において不足するところであったように思う。

まず、出身についていうと、池田輝政をたすけ、その父信輝が長久手の戦で討死したあと、池田家再興に献身的なはたらきをした筆頭家老伊木清兵衛を父にもち、父の死後、輝政の片腕となって活躍した伊木長門守忠繁が兄である。忠繁は、現存する国宝姫路城の縄張を行い、その工事を完成させた器量人で、池田家家臣団の最右翼であったのだから、家格においては、文字どおり、申し分がない。

ところが、『池田輝澄記』にも書かれている履歴をみると、〃本多包政（かねまさ）に仕えたが、牢人（ろうにん）していた〃となっている。父も兄も、池田家第一級の家臣であるなら、同じ池田家に仕えて忠勤を励むのが普通と思われるのに、伊織は他家へ仕えている。どうしたわけであろう？これを解く史料は、今までのところ、見つかっていない。そのうえ、〃本多包政〃という人物もはっきりしない。前後の関係から見て、大名であると思われるが、該当する人が見当らぬ。『池田輝澄』という文献そのものが、史料的にはいろいろ問題のある書物で、記述内容の不的確さを指摘されているだけに、書き誤り、写し違いも少なくないと思わねばならない。仮りに、そうだとすれば、「本多包政」に近い名の大名を探さねばならないが、こうした場合、すぐに思い浮かべられるのが「本多忠政」である。忠政は、徳川四天王の随一といわれる本多平八郎忠勝を

父にもち、父の死後、伊勢桑名城一〇万石を相続し、二代将軍秀忠から最も信頼された人物で、妻は、徳川家康の長男信康の女。また、忠政の嫡男忠刻は、大坂城を脱出した豊臣秀頼の未亡人千姫の婿である。徳川家臣団中〝閨閥第一級の家柄〟というのが、このころの本多家であった。

池田家は、輝政が徳川家康の二女督姫を後室に迎えた、といっても、もともと外様大名である。その家老の二男が、このような地位と格式、将軍家との深い関係をもっている本多忠政に仕える、というのはどうであろう。何か不自然に思えてならない。それに、この本多忠政は、池田利隆の嫡子光政が鳥取城へ所替を命ぜられた元和三年、あとを追って姫路城主となるのであるが、そうしたときに、伊織が牢人するというのも、普通には考えにくい。こうしたことからいって、「本多包政」を「本多忠政」の誤記とする考えかたは成立しがたいことになり、結局、「本多包政」は「はっきりしない」に帰着する。そして、伊木伊織の履歴は、〝前歴不明瞭〟ということになる。

しかしながら、「伊木清兵衛の二男」は、まちがいない。元和元年に興された山崎藩の家老として推挙されたのもそのためであろうが、こうした過程をとおしてみて、具体的な活動データーはわからないものの、伊織は、父や兄より、かなり劣った人物とみてさしつかえないであろう。立藩四年後に、こうした人物が召し抱えられ、しかも、藩の主脳におさまったことはまことに残念なことで、後年家中騒動が起こる原因の一つも、やはり、この伊織の人物、識見、また、手腕、力量が大きくかかわってくるわけである。

伊織の召抱えに続いて、輝澄の家臣となった菅友伯は、さらに問題の多い人物であった。さきにも述べたごとく、『倭臣』・『奸倭の臣』の典型的人物で、家中騒動をひろげ、最後に、取り潰しの運命に立至らせた張本人である。しかし、この人も、履歴は、あまりはっきりしない。もと、大坂城内で、儒学によって秀頼に仕立た、ということが『池田輝澄記』に書かれているが、ただ、それだけで、それ以上のことはわからない。しかも、この大坂牢人が、山崎藩に召しかかえられる契機となったのは、叔母が、輝澄の側室であったからだ、ということになっている。一般によくある例で、いわゆる〝縁故就職〟の類（たぐい）である。現代にもよくあることだし、このこと自体は、別に、どういうこともない。要は、人物如何にかかっているわけだが、友伯の場合は、この〝人物〟がよくなかった。いや、悪すぎた。武芸とか、政治と

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎(62)0700(代)

か、武士の表芸にあたるところに置いても困りものであるが、藩主の顧問、あるいは秘書のような仕事にたずさわっただけ、いっそう始末が悪い。藩主には、常に接触する機会があるので、いきおい、あること、都合のいいことを述べるようになる。しかも、こういう人に限って能弁である。よほど、しっかりした藩主でないと、それに引きずりこまれる。何度もいうことであるが、まことに困った性格の持ち主であるといわねばならぬ。

『池田輝澄記』には、この友伯と伊織が、〝はじめ、昵懇(じっこん)であったが、のち、疎遠になった〟ことが記されている。仕官したはじめは、藩内の有力者に、極力、取り入らねば損だ。伊木伊織は、藩内の最有力者である。それだけに、積極的にはたらきかけ、昵懇な関係を結んだのであって、伊織が、国元、すなわち、山崎に常住していた関係上、書信や音物(いんもつ)なども、ずいぶん頻繁に送ったことであろう。

遠く離れた山崎との間がこうであるから、江戸藩邸における周辺への配慮や取りはこびは、それこそ、至れり、尽くせりであったことであろう。藩主の御覚(おんおぼえ)が芽出度(めでた)くなったのも当然である。

召抱えられてからの数年間は、こうした日常に、心せわしく立ちまわったことであろう。しかし、やがて、まわりが、自分の思う方向にまわってくると、そろそろ、本領を発揮してくる。この第一のあらわれが、「江戸詰家老(えどづめかろう)」の推挙である。

これまでの山崎藩政は、輝澄主導のもとに、家老伊木伊織が取り仕切って進めてきた。ところが、参勤交替制によって、生活の半分を江戸で過ごすこととなると、江戸藩邸を取り仕切る人物、すなわち、江戸家老が必要になってくる。こうしたとき、誰が、この江戸家老を推挙し、どうした過程のもとにその採用が決定されるかは甚だ重大で、しっかりしたもの、りっぱな人間が推薦(すいせん)し、具眼(ぐがん)の士がこれを検討すれば問題はない。それほど理想的でなくとも、比較的それに近いものであれば、それでも結構である。ところが、輝澄は、この江戸家老設置の意図を菅友伯に洩らし、友伯の推挙によって、大坂浪人小河四郎右衛門が採用されることとなったのである。このことを裏からみれば、友伯は、それだけ、藩主の信頼を得、その存在を高く評価されていたことになるし、輝澄は、このような重大問題を、もっと然るべきものの間で検討させず、また、自らの眼識によってその人物を選び出すほどのことができなかった不明さを露呈したことになる。山崎藩政のつまずきは、こうしたところから出てくるのであって、あとは、敷かれたレールを、どのように車が運ばれてゆくかであり、最終的には、家中騒動によって取り潰しに逢う、という破目(はめ)になるのである。

戸原物語（三）

志水出世

磨(ひきうす)（碪）・臼(つきうす)・碓(からうす)・臼(こめつきうす)・（春）(うすづく)・碓(いしうす)・餅(もち)・擂り鉢

ゴローンゴローン、又婆さんがだんごを碾(ひ)いているのかな？そ

れとも朝から遠雷の音か？こうして眠りから目を覚ますと、何のことはない洗濯機の音である。

磨ーひきうすー今読んでくださっている皆さんにも何のことかわからない方もあるでしょうし、言葉としていても使われたことは殆んどないことと思います。昭和二十年代までは、まだどこの家庭でも黄粉、蕎麦（そば）粉、米粉、はったい粉、豆腐（とうふ）を碾（ひ）いたものだ。

今は漬物の重石になったり、ひどいのは踏み石になったりしている。江戸時代の踏み絵ならぬ踏み磨を百姓にさせたら、絶対にしなかっただろうし、＜幕藩体制を支えたのも石臼である＞から幕府としてもしなかっただろう。一昔前は臼の上にお供え物をして年始を迎えたものである。

戸原地区の磨は直径二十七～三十cm厚さは十～十六cmあった。よく使われたものは九・五cmで挽（ひ）き手穴までちびているのもあった。重さは、上臼が十～二十kg下臼もほゞ同じ位である。

今も寺西コトヱさんはひきうすをひいて優雅な食生活を送っておられる。一般には＜箸でつまめないような充塡パックづめ豆腐＞死に体の＜炒り胡麻＞洗い胡麻（ごま）は生きている＜これをフライパンに入れて火にかざし二、三粒とびはねたらOK。生胡麻を貯えておいて食べる直前に炒って擂（す）ってすぐ食べる。これが自然食だ＞

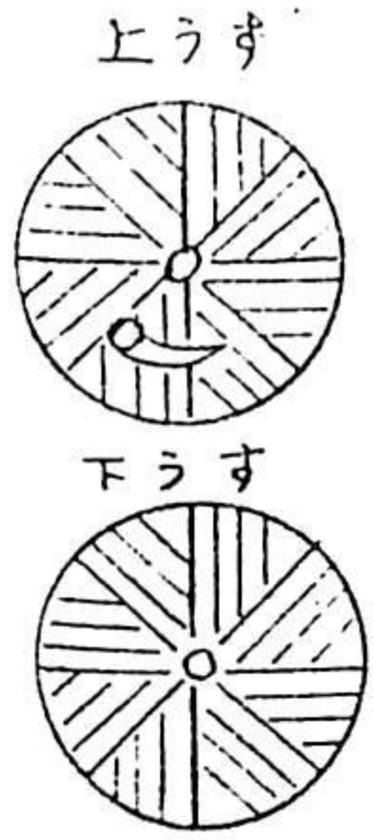
ご飯にしても電機メーカーの思うまま味で炊（た）かれ個性のないものになった。初めちょろちょろ中ーージワジワ時に下ひいて…。懐しい炊き加減は土の竈（くどかまど）でないとでてこない。

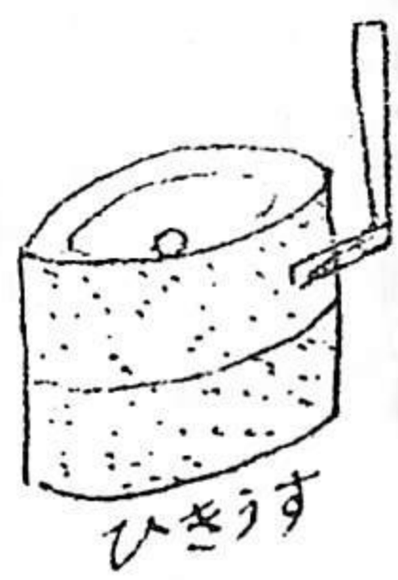
福嶋義美さん方でお目にかかった石うすは当主が出征された頃に作られた割合新しいもので上臼二十kg、下臼二十一kg目の荒いものでした。

中心穴に向った八本の溝を主溝、主溝に平行になった三本ずつの溝を副溝とよんでいる。ところで上うすの回す方向はどちらかご存じですか。

一、どちらでもよい

二、時計まわり





最新型カラー現像機導入
カラープリント・スピード仕上げ

三、反時計まわり

四、ひく品物によってちがう

この福嶋さんとこのうすは主溝が八本、副溝が三本なので「八分画三溝式のうす」といいます。近畿はこの型式が圧倒的に多いいが副溝は八本前後が普通である。

安富町から夢前町四辻へ越す峠の中腹に「春」と書く十数戸の集落がある。この字は「うすずく」と読み「春」と書いたりしている

辞典でみると「米をつくこと」となっている。一般に米をつくのは碓（からうす）です。玄米を碓（いしうす）の中へ入れ「つき輪」という米のまわりをよくするもの（木製とわら製とあった）をいっしょに入れて足でつくのもあり、水車でつくこともあった。子どもの頃、米つきをさされ、すこしして「もうええか。」「まだあかんもっとつけ。」しばらくすると、すぐたいくつして、米を手のひらでこすってみがき「もうええだろ。」「まだや、もう百つけ。」

最近永井国明さんとこで土臼（とうす）（唐臼）をもらってきた、比較的新しく見えるがお姉さん（山口澄代さん）に聞いても使った覚えがないとのことだから、大正か昭和の初期のものだろう。

土臼は竹で丸いかごを作り、にがりで固めた赤土をつめ、樫（かし）の木の歯を石うすの目と同じパターンで打ちこんで作る。土臼は籾（もみ）を米にするものだが籾摺（もみす）りは殆んどが夜業（よなべ）だった。ねむいので景気づけに歌を歌ったりするが一日挽いても一反分六〜七俵ほどだ。

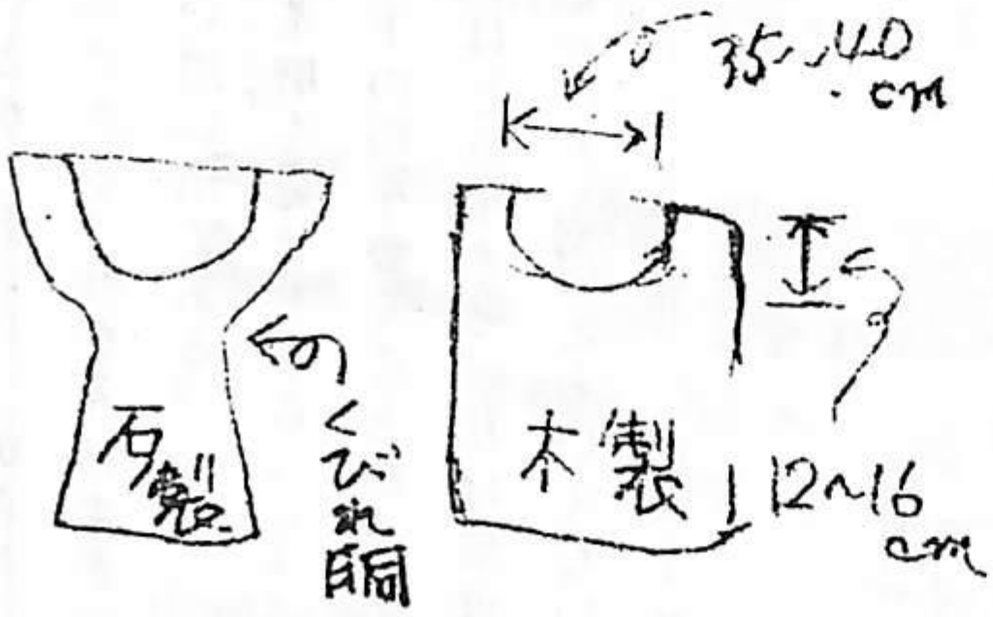
今は昇降機、高速差動ゴムロール、万石、唐箕（とうみ）を一連のものにしたもので、あっというまにやってしまう。歌なんかでることもない。

もちをつくのは竪臼（たてうす）である。木製と石製があるが、〈月の兎がついているのは古い型式の胴のくびれたもので竪杵（たてきね）でこれも中途のくびれた細長い棒である〉

木製のうすは、欅（けやき）松、榧（かや）など、石製はほとんど宝殿石（熔結凝灰岩）で作られている。新しくても軽くするためくびれ胴にしてある。

今も年末には三〜四軒より集まってもちつきをしている。つくることもだが、集まることへの意義も大切な行事の一つだ。

〈広島県能美島で



はだいがら臼＝からうす＝で、もちつきをしていた〉とのことである。これなら二うす、三うす連続でついても疲れない。

木の竪臼はひっくり返して小麦のかち台＝小麦はたたいてあやした＝に使ったりした。

私の近くに木挽きさんがおられた。冬の仕事として竪臼作りをよくしておられたの見た幼い記憶がある。一つ作るのに一日がかりだ。木の板を挽くのに、ななめに立てかけて歌をやりながら挽いておられたが今は文句もわからない。

餅つきは一人はまぜ役がいるが、お鏡やかきもち、あられは手水をできるだけ少なくすると割れないとか、あられ、かきもちには色粉、砂糖、豆の呉など入れたものである。呉を入れすぎて、さっぱり切るのに困ったことなど古い思い出である。

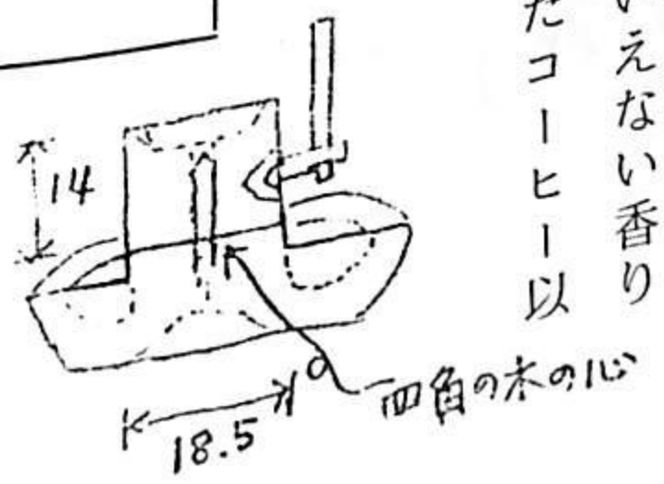
この間、石原春雄さん宅で立派な茶磨（ちゃうす）を見せてもらった。茶臼は抹茶を作るうすだが千分の十 ㎜以下の粉をひくことができる。

現在の抹茶はインスタント製品のはしりである。私は最近ある所でてん茶をひいて、その場でいただいたが何ともいえない香りだ。インスタントコーヒーとコーヒーミルで今ひいたコーヒー以上の違いである。

〈一九七〇年代に出現した電動餅つき機は、臼の置場すら見出せない都市生活者の、ささやかな手づくりへの願望をみたす設計であったが、不思議なことに、草深い田舎の旧家にまで農協の手によって普及し、餅つきの行事は根こそぎ駆逐される運命をたどった。

粳米（うるちまいもちごめ）も糯米も、おなじデンプン。化学的にはグルコースの縮合体。ところが粳米は長い鎖状につながったラセン状のアミロースから成るのにたいし、糯米はところどころで枝分かれした構造のアミロペクチンから成っている。杵でつくと、枝と枝とが互いにからみ合って、特有のねばりを生ずる。焼餅にして食べるときにはあまり気にならないが、雑煮にすると、上手に杵でついた餅と電動餅つき機とでは、格段の差。煮るとどろどろになり、乾けば細かい亀裂が出る。アミロペクチンが切れ切れになったのだ。

月面の斑点（まだら）を、兎が餅つく姿に見たてる空想の世界と、集団行事としての餅つきは、日本人の子孫に遺したい宝物だ。〉

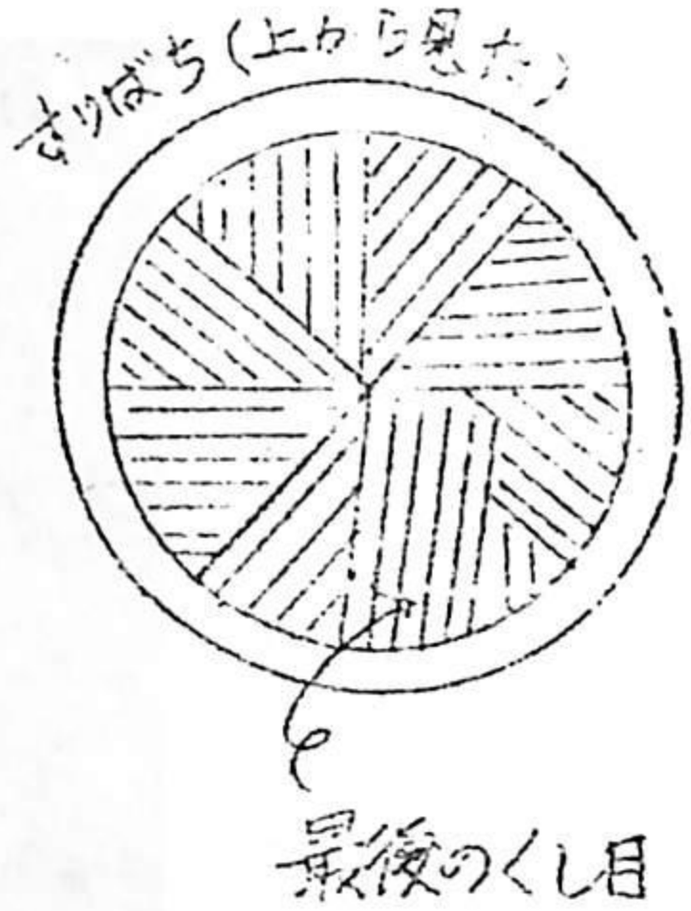


抹茶は今も電動だが石臼でひいている。しかし一時間に四十～八十グラム程しかひけないから、高価である。

臼と縁がないようだが深い絆をもっているものにすり擂り鉢がある。

擂り鉢の目をよく見ると

石臼の逆の目がくし状のもので作ってある。胡麻をすって料理にかけると、何でもうまくなるので胡麻化せるし、よくすると油がでてくる。この世の中ねばっこく上役にまつわりつくのを胡麻すりといって栄転のお祝いが擂り鉢だったり、人の持ち物をうまく掏る者を、胡麻の蝿と言ったりする。胡が出たついでに胡がつく物は西城より絹の道を通って日本へやってきたものだ。胡瓜、胡菜、胡椒、胡桃、胡豆、胡坐。



山の芋もおろしただけでは、ねばりと独特のまろやかさが、擂り鉢ですりながら汁を加えて、初めてあの風味が出る。山の芋は赤土の深い所で、葛の繁っているような所のが、うまいと言われる。味噌もちょっと擂ってこそ風味を増す。

この擂り鉢も時代の波に押され、物置のすみに追いやられ、やがて何に使う物やらわからなくなる運命か。嗚呼無常。

※答、三、反時計まわり

参考文献　同志社大学教授　工学博士　三輪茂雄著　「臼」「粉の文化史」「粉と粒の不思議」また〈〉中は著書の中の文章借用しました。

地名小噺

資料部

古地名小噺、加生、門前、山崎村源ケ谷、加生はもともと柏生（お）うの里と言ったのが元語で、何時しか加生と言う様になったと聞く、昔柏野郷は菅野谷から山崎村にかけて柏の灌木が沢山生ひ茂っていたものと思われる。今も山ずそには柏の灌木が所どころに見られるが、山崎西鹿沢闇斉神社の裏の藪の中には今も柏の大木が残っていて古えの名残りをのこしている。昔柏野郷と言ったのは、土万から菅野、山崎と、凡そ最上山の先端から須賀出石えかけて線引した南面揖保川迄と、御名川囲北を言った

健康づくりの相談が気軽にできる店
ごこう薬局
薬剤師　岸本八重子
岸本弘子
山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

ようであるが、今も八幡神社の氏子地域は柏野郷に入るのであって、上寺、庄能、今宿は高家郷として諸守神社の氏子となっている、八幡神社は元加生の今宮地区、今の須加神社のあたりに有ったらしく、あの地区を今も元宮さんと言っている。何時の頃か詳らかではないが今の門前町東垣内の山の中腹に移されたと言う。お宮の西側には流鏑馬（やぶさめ）の馬場が有って其の西には昔大王寺と言う奈良時代の寺が有ったと言う。最近あの地域から蓮華紋瓦が発掘されて古い寺の跡であった事が伺われる。役場の字切図にも東大王寺、西大王寺などと字地名が残っている。門前村と言ったのはその寺の有った時代から言ったのか、それとも八幡神社の門前町として言い出したのかは定かでないが、可成古くからあのあたりを門前村と言ったらしい。或る一説には篠の丸城の大手門が有ったからと言った人もあったが此の説はあまり信じ難い、又八幡神社の下から辯天池のあたりにかけて的谷と言う字地名が有るが、それは藩政時代に弓、鉄砲の的が辯天池の堤防下にあったからと古老は言っている。又凡そ此の辺りから上の山の山麓一帯を古くより山崎村と言う、要するに今の元山崎と言う地域が山崎村の中心であったと思われる。境界線ははっきりしないが、今の最上山の南麓から高野と称した台地の上を山崎村と言ったのではないかと思う。又大古には、此と辺を矢多造りの邑とも言って上の山の笹竹を利用して矢を沢山作っていたらしく、石の鏃や鉄の鏃が良く出たと言う。猶又元山崎地区を役場の字切地名では源ケ谷と言い、荒神さんの参道から茶腕山へかけて東源ケ谷と言い、それより西側辯天谷へかけて西源ケ谷と言うらしい。此の谷から出る清水はすべて山崎城の堀の水源となり、人家の下水は皆、だるに溜めて畑地の肥やしにするか、町の側溝の汚水は東へ流すか西へ流して、堀の取水とは交叉させなかったと古老は語っている。源ケ谷の地名は其の堀の取水の故に言ったのか、それとも山崎村の水の元をなす源ケ谷をさして言ったのかは定かでない。そして又幕末より茶腕山で焼いた焼物は源谷焼（げんこくやき）と言ったそうである。以上の小噺しはその昔山崎史談会と言った古老達の集りで聞いた話であって、文献ではない事を御承知願いたい。

「奥の細道」三百年

安井清介

「月日は百代の過客にして、往きかふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮かべ、馬の口捉えて老を迎ふる者は日々旅にして旅

を樓處とす。古人も多く旅に死せるあり。……」

松尾芭蕉が元禄二年（一六八九年）奥の細道に紀行して三百年になります。元禄二年は西行法師五百年忌に当り、ひそかなる追悼の事業であったともいわれる。

「今年元禄二年にや、奥羽長途の行脚ただ仮初に思ひ立ちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、さだめなき頼みの末をかけて、其の日漸く早加という宿に辿り着きにけり」と芭蕉は紀行文に書いています。

私が御影師範学校三年生の時の国語のテストにこの文の解釈が出たので懐しく想い出しますが、現在では東北新幹線が上野から盛岡まで延び東北旅行も日常茶飯事のようになりましたが、芭蕉は「奥羽長途の行脚」とか「若し生きて還らば」と言っています。東北旅行も水盃の旅行だったのです。草加は現在「草加せんべい」で知られている所でしょう。

旅行読売六十三年九月号に『このさい「奥の細道」巻頭の一文ぐらい、ソラで正確に言えるようにしたいものです。』として「はくたいのかかく」とちゃんと読める人少なし。と書いています。「はくたいのかかく」とは「白帯の価格」つまり白い帯の値段かと間違えたりします。日本語は実にむずかしいものです。日本語を知らぬ日本人も日本人と言っていますが、日本人ももっと勉強すべきでしょう。

芭蕉は元禄二年、江戸深川六間堀の杉風の別墅に移り、

「草の戸も住みかはる代ぞ雛の家」

の句を残して三月二十七日江戸を発ちました。芭蕉は千住で船をあがり出立ちの心境を〝前途三千里の思、胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ〟といって

「行く春や鳥啼き魚の眼は涙」

の句を矢立の初として奥羽行脚の旅に出たのです。白河の関では曽良が、

「卯の花をかざしに関の晴着かな」

を詠み、岩沼では竹駒神社のそばにある根の生え際から二つに分かれた松の名木を、

「桜より松は二木を三月越し」

と、名取市の笠島では

「笠島はいづこさ月のぬかり道」

を詠んでいます。

芭蕉主従は五月五日仙台に着き、仙台周辺の歌枕を見て回り最北の官寺だった陵奥国分寺にも足を運んだ。

「あやめ草足に結ん草鞋の緒」

仙台から塩釜への途中多賀城を訪ね〝いぼのいしぶみ〟と呼ばれる天平時代の苔むした石碑を見た。伊達政宗が造営した奥州一の宮の塩釜神社では「……宮柱ふとしく彩様きらびやかに、石の階九仞の重り、朝日あけの玉かきをかがやかす。かゝる道の果、塵土の境まで神霊あらたにまします。」と驚嘆しています。五月十日松島に着き、曽良が

「松島や鶴に身をかれほととぎす」

と詠みました。松島から石巻へ行き石巻港を一望する標高六十米の日和山で眺望を楽しみ

「島々や千々にくだけて夏の海」

の句を遺し、昭和六十三年六月、芭蕉と曽良二人そろった行脚像がこの日和山に建てられました。

五月十四日、平泉に着き「三代の栄燿一睡の中にして…」といった藤原氏三代の史跡を訪ね、中尊寺では

「五月雨の降りのこしてや光堂」

「夏草やつはものどもが夢の跡」

の句を遺して山形へ向かい、尿(しと)前では

「蚤虱馬の尿する枕もと」

と当時の旅の苦労がしのばれる句を詠みました。

「閑さや岩にしみ入る蝉の声」

で知られる立石寺に詣で、三月六日羽黒山、出羽神社に参詣し酒田へ出ました。おしんで知られた酒田です。酒田から北上して象潟へ足を伸ばし

「象潟や雨に西施がねぶの花」

を詠み、反転して日本海沿岸を南下し、出雲崎では

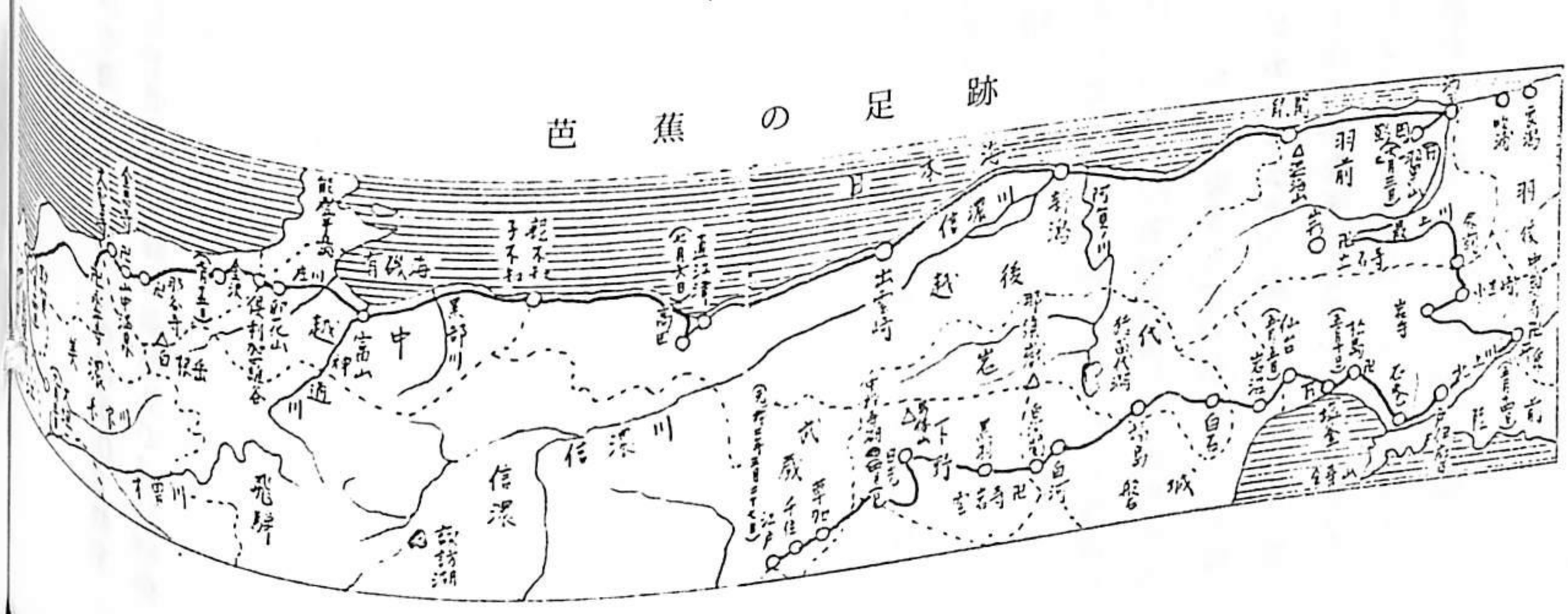
「荒海や佐渡に横たふ天の川」

七月六日、直江津、親不知、子不知、富山を経て、七月十五日、金沢へ、那谷寺、金昌寺、永平寺へ参拝して八月十四日、敦賀九月三日大垣へ到着しました。伊勢参宮をして郷里伊賀へ帰りました。

比較的近い所にある芭蕉の史跡では、近江の「幻住庵」「義仲寺」「無名庵」嵯峨野の「落柿舎」等々があります。元禄七年十月十二日、

「旅に病んで夢は枯野かけめぐる」

の句を遺して大阪で五十才の生涯を閉じました。今の世の私達も三〇〇年前の芭蕉と曽良の心を学びとりたいと思います。



春日神社の由来

多田嘉一

河東高所の春日神社の森に樹齢四百年余の夫婦杉がある。このお宮の由来は、記録によると、人皇五十六代清和天皇の曽孫正四位多田摂津守源満仲の子、頼光の十数代の後裔、従五位多田佐渡守源政豊が、元亀元年（一五七〇）足利十五代将軍義昭の時代、義によって朝倉義景、浅井長政と共に姉川の戦に加わり、織田信長と合戦す。激戦の後、戦い時に利あらずして敗れ、万軍散乱して政豊辛うじて多田の本城摂津の国川辺郡に落ち伸びる。その後、天正六年織田信長の追及執拗にして再び戦に敗れ播磨の国宍粟郡高家郷に落ち伸び、時の領主宇野下総守政頼の好意により、高所村に七箇所の土地を賜り一族と共に世を忍ぶ。政豊は疲れ果て戦いの無情なる事を悟り仏門に入って浄土宗の僧となり、高所に多田院常宝寺を建立。その時に摂州より来たる多くの家臣の中、丹波八郎左衛門が背負い来し春日大明神を寺の側に建て家臣と共に多田家安泰の為に懇ろに祀る。政豊天正七年卯己四月にこの地で病没す。政豊の子政清も僧となり、名を傳空と称し、常宝寺の住持となる。然るに天正八年（一五六〇）四月織田信長の追及厳しく羽柴秀吉をして長水城を攻略す。長水城五月十日遂に落城し宇野氏一族滅亡す。秀吉領内の寺院に事如く火を放さんとす。よって高所の多田院も危くなり、時の住持傳空が秀吉の陣所に趣き寺の存続を懇願す。その時、運良く河内より来陣せる軍目附丹羽五郎左衛門の取りなしにてようやく寺の災難を免かれたと言う。それより住持傳空は天正九年丹羽五郎左衛門に従い伯耆の大山に趣き大山寺の僧門に入り新に戒壇の授戒を受け、再び高所村に帰り、荒廃せる寺を建て直し仏門に帰依し以来代々寺門を守って祈禱を行せり。なお一門の中で春日大明神を祀って神主となった者が文禄元年奈良を訪ね春日大社の神主従三位柏尾筑前守藤原朝臣信久の元に趣き春日大社の神霊を仰ぎ、天照皇大神宮、春日大明神、八幡大菩薩の三者託宣を受けて帰り、寺内に春日神社を建立し神霊をまつる。その時、双又の杉を御神木に植え三神の宝木とする。これが今の夫婦杉である。一門の者宗源神木と称し奉る。なお又多田家の遠祖、源経基、源満仲、源頼光の三者も共にお祀りす。

春日神社の末社高倉権現の由来

元権現山より無格高倉神社、祭神、木花咲耶姫命を合祀許可。明治四十五年三月三日、春日神社の西側に三坪程の本殿を造り権現山より移転す。村人の伝承話によれば、出雲の国支配者の配下時代より高所部落にまつられ伊和族の婦人出産の神として、信仰すれば安産まちがいなしと崇められ、沢山の人が参拝されます。女の方は是非御参り下さい。優れた良い子が授かります。

山崎町下牧谷の石水山金蔵寺
本尊観音略縁起

藤田始男

抑、御厨子の内に安置し奉る御本尊正観音菩薩の由来をくはしく尋奉るに、人皇四拾五代聖武天皇の御代神亀二年（七二五）中行基菩薩は衆生済度のため、諸国修行の砌、播磨の国宍粟の郡伊澤の里に巡り来玉ふ。其の時も入日の日かけに紫雲棚引赫々として光明を放ち行基菩薩是を拝し玉ふに、是は世の常の他にあらず、正しく尊き霊場にまします。早速に当山守護の本尊、出現なし玉へと深く祈請し玉へば、岩間おし明け清浄の水流れ出でて石室の内に金色の宝殿あり。其中に忽然として正観音、出現します。則ち聖に告て言う早速吾像を作り此所に安置せば末世有縁の大士とならん。この流水は毘盧遮那仏の大悲の智水なり。遠近の国民の種々の病を助け、安穏の楽をとらすべしと示し玉う。依之行基菩薩自ら御像を作り石室の中に安置奉り、双庵一宇建立し石水山金蔵寺と号す。聖歓喜の思ひを那し、有難さかな尊ひかな末世の今に至るまで霊験日々にあらたかにして、群参絶る事なく志此尊像を結縁して一度拝する輩は今生にては五穀豊饒の福裕に預り来世にては五濁悪世の因果をのがれ、極楽世界に生を得て永く無量の功徳を受る事疑ひ有るべからず。此の度、請人結縁のため開扉せしむるの間、何れも近ふよりて御拝のあられましよふ。

安政七年庚申三月吉日
右は神宮寺中興四世法印栄祥作書

石水山の御水のこと

この流れは毘盧遮那仏（万物を照し給う仏）の大悲の智水（仏の智慧にもたとえる水）にして諸病平癒健康長寿の恵みあり。御本尊正観音菩薩を拝すれば福徳を受け厄難を逃れ生業繁栄、学業成就、子なき人は心身健在容姿端麗理想的な子を授かり安産の御仏と御霊験あらたかなる観音様であります。石室より流れ出る水は冬暖かにして夏冷たく水温常時変らず約十二度ほどなり。

例祭日　開扉祭は二十一年に一
御祭は八月九日
十日

食品の店
いまや
さつき通り4丁目
TEL ⑥2 0169

秋の研修旅行

志水美好

昭和三三年に宍粟郷土会報として会報が創刊され、今年は三〇周年に当ります。その記念として今年も秋の一泊旅行を実施することになりました。一〇月七日は早々に七二人の会員が集って下ったので、予定時刻より早く七時四〇分、バス二台を連ねて山崎を出発しました。

台風二四号北上中の天気予報を気にしていましたが、絶好の旅行日和に恵まれ、旅路も順調にはかどりました。関ケ原インターを下り関ケ原ウオーランドの前のレストランで昼食をとりました。ウオーランドを見物する時間はないので、中に立てられた武者人形をかいま見て、入口前で記念写真を撮っただけで出発しました。

岡崎インターで東名道と別れ岡崎城へ向いました。岡崎の藩主本多家は山崎の藩主本多家の宗家に当る上、縁組等で特に近しい関係である由ですが、今までは日帰り旅行のため、一度も訪れる機会がなかった訳です。約一時間の予定で銘々自由に岡崎城と家康館を見学しました。家康館には鎌倉時代から徳川家康までの四二〇余年間を、家康と三河武士たちの足跡を中心に、時代順に展示してあります。又、満性寺の宝物の特別展もありましたが、時間を気にしながら館内を一巡して天守閣へ急ぎました。昭和三四年復元された天守閣は三層五階になっていて、二階から四階までは江戸時代の岡崎を紹介する展示場になっています。立派な城郭模型や歴代城主の遺品で昔を偲びつつ、五階の展望台まで昇り、三河平野を一望して急ぎ車へ戻りました。

岡崎城を後にして、次は、徳川家累代の菩提寺である大樹寺を訪れました。案内役の若者のユーモアをまじえた上手な説明に、一同和やかな気分になって聞耳を立てました。続いて本堂に詣りました。家康が終生座右の銘とした「厭離穢土、欣求浄土」と大書した聯（レン）も左右の柱に掲げられています。左側にある宮殿型の厨子に有名な家康の木像も安置されています。冷泉為恭の襖絵や、祖洞和尚が勇戦した門の閂（カンヌキ）の収められた保管庫も、二班に別れて見せてもらった。流石徳川家の菩提寺だけあって、重要文化財の建物・襖絵など沢山残っているのに感嘆した。

大樹寺を辞して約一時間南下する。広い三河平野の中のややこしい道を運転手の巧なハンドルさばきに委（ユダ）ねて辿り、五時過ぎ吉

良温泉に着いた。竜宮ホテルの大広間での夜の宴会も盛会で、次々と自慢のノドを披露して楽しい時を過しました。

翌八日八時半、ホテルを出発して吉良家の菩提寺である華蔵寺えと向いました。妙心寺派の禅寺で、山門前に「吉良義央遺跡」と書いた大きな石碑が立っていた。本堂の左手にある墓地に義央の墓をたずねて香華をささげる。狭い墓地へ一度には入ったので混雑してしまった。霊屋の義央の木像も見られなかった。やがて、住職夫人の案内で方丈や裏手にある枯山水の庭園を見せてもらった。赤穂市と吉良町の関係も三百年を経た現在では和融ムードだと聞いてはいるが、西播の人達が訪れるのは稀だろうと思った。

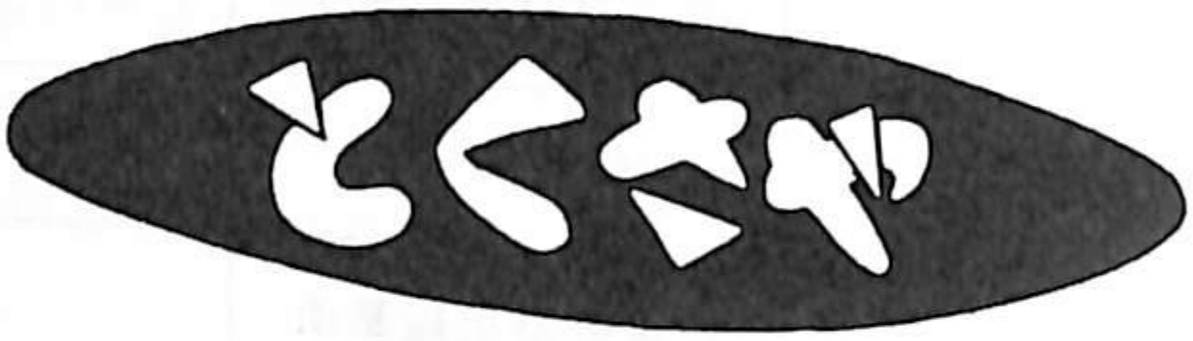
九時半華蔵寺を出発して、三河湾岸を西へ一路ひた走る。延長千メートル余の海底トンネルを通って半田市へは入り、今度は知多半島道路を北上して、一一時半頃熱田神宮の森に着きました。

大鳥居をくぐって樟の大木等の生い茂った境内の砂利道を進んだ。三種の神器のひとつ草薙剣を祭ってある本殿を遥かに拝して大前にぬかづく。拝殿横にある天皇陛下の御平癒祈願の記帳の列に加わる。一諸に詣った人も大抵記帳をしておられたようだ。山崎で記帳の機会がなかったので、何だかほっとした気になる。宝物館は見る時間がないのであきらめて、有名な信長長塀だけは近々と眺めて帰ることにしました。

テレビ塔で昼食をとり、暫し休憩していよいよ最後の見学場である名古屋城へ急いだ。立派に再建された正門から城内へ進む。折から「緑・花・祭などや八八」の最中で、城内広場には菊花展・生花展が催され、いろんな売店が屋台を連ねて賑わっていた。金鯱で有名な天守閣は惜しくも戦災で焼け、昭和三四年外観は昔のままに復元された近代的な鉄筋コンクリートの天守閣が建てられ、内部は博物館になっている。本丸御殿も戦災で焼けてしまい、その礎石だけが往時を偲ばせている。天守閣をバックに記念写真を撮ってから、先ずエレベーターで七階まで昇る。色々と見あきしない展示物があるが、何分時間がない。各階を一通り見ながら天守閣を降りた。一時間位では本丸の中をざっと歩いた程度で終ってしまう。二の丸庭園など見たい所も残っているので、個人で後日ゆっくり再び訪れることと夢みつゝ城の正門を出た。

慌しい一泊旅行であったが、一応予定のコースが終ってやれやれである。一同名残を惜しみつつ、二時半、名古屋を発って帰途についた。一宮インターから名神道に入った頃、空も漸く晴れて来て太陽も照りはじめた。カラオケやナマオケで歌謡曲を歌っている間に自動車は快調に走ってくれ、

る。天王山トンネル付近の渋滞にも会わず無事通過できた。途中、養老、草津、社でトイレ休憩をとり、予定より半時間程遅れて七時半、全員恙(ツツガ)なく山崎に帰着できました。参加下さった皆様方の御協力を感謝しますと共に、今後の御健康を祈っています。

創業嘉永元年　きものと共に130余年
高級呉服の専門店


山崎町本町（さつき通）
☎(0790)62-1680代

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL(62)0036

蔵書の活用について（其の三）

事　務　局

会報第71号72号に続いて追加分をお知らせいたします。

これの利用については会報71号15頁をご覧下さい。

書　　名	著者又は発行所名	備　　考
歴史手帖63年9月号より平成元年1月号まで	名著出版	
兵庫史幣史の研究第9号10号11号	兵庫紙幣史編纂所	
歴史と神戸　27巻4号 1. 北播磨の荘園（上） 2. 小野市域の地名について 3. 揖保郡新宮町の善定・札楽岡名坊の原義 4. 上郡町大字名全解 27巻5号 1. 丹波志寺院之部（多紀郡） 2. 神戸日報 3. 平福本陣神吉氏別邸跡の庭 4. 竜野市小犬丸は名田地名である 5. 地名を護ろう 27巻6号 1. 播磨地方・明治期出版図書目録集成 2. 画家曽我蕭白と高砂 3. 赤穂の絵馬師 4. 落合重信氏の地名考に関して	神戸史学会	
兵庫県地名大辞典	角川書店	

神戸史談　263号 1. 蕪村と神戸 2. 神戸における蕪村の門人 3. 兵庫・神戸と蕪村・大魯（下） 4.「蕪村と神戸」展を省みて 5. 蕪村略年譜 6.「蕪村と神戸」展報告 7. 神戸の芭蕉句碑について 8. 神戸の句碑を訪ねて	神戸史談会	
機関紙「風」創刊号～12号	日本風土記の会	

本のある生活を——

さつき書房

山崎町鹿沢55-3
☎(0790)62-4674

山崎郷土研究会会報総目次

「宍粟郷土研究会報」第31号

昭和43年8月20日発行

千種地区におけるタタラ（製鉄）遺跡の発掘　上山　勝
明治初年の「地理書」に叙述された〝宍粟郡〟　中村　潔
宍粟の畸人　小林　楓
宍粟鉄の刀　黒田　義隆
琵琶湖周遊見学旅行記　村
盆踊唄
新刊書紹介　会員名簿（25）　雑報

「宍粟郷土会報」第32号

昭和43年11月25日発行

古民家の保存について　黒田　俶
随筆　樹　島下　重子
風月集と素練（四）　多淵　健次
京都洛西方面見学記
雑報

「宍粟郷土会報」第33号

昭和44年4月20日発行

弘仁十二年播磨発見の銅鐸について　島田　清
鉄山炭山の指定　宇野　正碩
山崎盆踊歌　一老女
千種町史料室　八幡　史太郎
青嶺（句集抄）
千年家解体修理
長水落城の日
雑報　会員名簿（26）

「宍粟郷土会報」第34号

昭和44年9月1日発行

小笠原忠脩・飯綱の鎧　安井　記
たたら連想抄
旧安志藩主小笠原家と
「諏訪法性」の兜について　黒田　義隆
「播磨国皮多村文書」刊行　島下　八重子
鳥取方面見学旅行　中村　潔
雑報　会員名簿（27）

「宍粟郷土会報」第35号

昭和44年12月10日発行

享保期の宍粟郡千種組、百姓越訴一件　上山　勝
多趣味の文士　植田麗翠　安井寅一

播磨国分寺の古瓦　福井託二
奈良方面見学旅行記　安井俊二
闇斎の屋敷
故安井克文泳草抄
展覧会だより　総会案内

「宍粟郷土会報」第36号

昭和45年4月15日発行

山崎三景さいこの節　安田青風
闇斎学の源流と末流―闇斎と三教一致―　中谷康郎
随筆　旗結び　島下八重子
揖保川の川魚業　宇野正碌
山崎藩札について　安井正
農村歌舞伎舞台―県指定文化財―
供出梵鐘の銘（一）
本会だより　本会総会報告

「宍粟郷土会報」第37号

昭和45年8月1日発行

士族の商法　黒田義隆
大江山の酒呑童子（上）　中村潔
倉敷方面見学旅行
供出梵鐘の銘（二）
郷土だより　会員名簿（28）

「宍粟郷土会報」第38号

昭和46年5月1日発行

山崎騒動　堀口春夫
大江山の酒呑童子（下）　中村潔
播州八徳山寂心上人伝　杉山よしあき
供出梵鐘の銘（三）
西播怪談実記抄　山崎の孤人を殺し事　安井俊二
島下八重子さん
千年家修理竣工
歴史研究部便り

「宍粟郷土会報」第39号

昭和46年12月1日発行

大和十津川郷　中村潔
篠の丸城・山崎城　島田清
長水軍記（一）
水谷川の碑
郷土だより　後記　総会案内

「山崎郷土会報」第40号

昭和47年4月20月発行

近世初頭の山崎藩（一）　島田　清
宍粟郡の縄文遺跡　村上紘揚
甘宮と辛宮　中村　潔
長水軍記（二）　作者不詳
一枚の文字瓦に想ふ　福井託二
図書紹介　郷土だより　会報　「宍粟郡誌」復刊
後記

「山崎郷土会報」第41号

昭和47年9月1日発行

近世初頭の山崎藩（二）　島田　清
地質時代の山崎　岩井忠彦
長水軍記（三）　作者不詳
幻の西蓮寺　福井託二
延宝年間の山崎
山崎県の役人

「山崎郷土会報」第42号

昭和48年5月10日発行

明治四年十月山崎県農民騒動　上山　勝
近世初頭の山崎藩（三）　島田　清
俗説　田町逆川眼が治る　福井託二
近世初頭の山崎藩（四）　島田　清
揖保川〝高瀬舟〟の想い出　中村　潔
江戸末期の山崎の人口について　宇野正碩
「宍粟郡誌」復刊　安井俊二

「山崎郷土会報」第43号

昭和48年10月20日発行

近世初頭の山崎藩（五）　島田　清
長水軍記（四）　作者不詳
闇斉神社奉納詩　桧垣賀陽
巷説　続衣坂異聞　福井託二
池田恒元家中人数帳（一）
郷土だより　おことわり
本会総会予告

「山崎郷土会報」第44号

昭和49年11月20日発行

近世初頭の山崎藩（六）　島田　清
河東の愛宕山について　福井託二
近世初期の山崎町古地図を見て　堀口春夫
幻の西蓮寺（完）　福井託二

昭和50年4月25日発行

近作十首　故安井俊二
安井大人の死を悼む　福井託二
故安井俊二君を悼む　島田清
郷土だより

「山崎郷土会報」第46号

昭和50年11月1日発行

近世初頭の山崎藩（七）　島田清
コウ寺の源平狸　福井託二
郷土研究会見学旅行同行記　松原磐
続池田恒元家中人数帳（其二）
郷土だより

「山崎郷土会報」第47号

昭和51年5月25日発行

近世初頭の山崎藩（八）　島田清
あの木あの岩の想い出　福井託二
御用留日記　堀口春夫
宍粟郡史蹟　宇田義雄
郷土だより

「山崎郷土会報」第48号

昭和51年11月20日発行

近世初頭の山崎藩（九）　島田清
民話小噺　堀口春夫
山崎町町年寄日記にみる江戸時代の盆踊　宇田義雄
宍粟郡史蹟（二）　福井託二
山崎界隈の里言葉
山崎町史の発刊近し
郷土会だより　おしらせ

「山崎郷土会報」第49号

昭和52年7月20日発行

近世初頭の山崎藩（一〇）　島田清
千本屋廃寺発掘調査はじまる
明治以来百年の年譜
巷説　お伊勢参り　堀口春夫
郷土研究会五十二年度の方針
史跡・古文書などを大切に保存しましょう　福井託二
〝史跡部〟だより

「山崎郷土会報」第50号

昭和52年11月30日発行

近世初頭の山崎藩（一一）　島田清
荒井堰の歴史と伝説　千本廉治
明治代の子供の遊び　兵隊ごっこ　福井託二

昭和五十二年度指定の史跡に就いて　堀口春夫
明治以来百年の年譜（其の二）
役員会情報

「山崎郷土会報」第51号

昭和53年6月1日発行

近世初頭の山崎藩（一二）　島田清
福井託二さんを偲ぶ　下村憲一
友の郷土の物語り　入江静夫
古く栄えた千種鉄について　松原磐
〝ええことはしちゃるではようこいやい〟　山田禎彦
昭和年譜　堀口春夫
史跡部だより
編集後記

「山崎郷土会報」第52号

昭和53年11月8日発行

近世初頭の山崎藩（一三）　島田清
落首小話　堀口春夫
雨乞ひの霊宝『鮓答』　下村憲一
郷土研究に若さを　安井清介
明治の白洲 ― 山崎 ―　織金義雄
山崎昭和年譜　堀口春夫
史跡部だより
近況だより

「山崎郷土会報」第53号

昭和54年7月15日発行

近世初頭の山崎藩（一四）　島田清
郷土研究会進展の為に　安井清介
旧史跡を生かした埋御門・角櫓早期復元を望む　前田重孝
秋の見学旅行記と感想　堀口春夫
揖保川雑感　下村憲一
続山崎昭和年譜　堀口春夫
史跡部だより
近況情報
会報部

「山崎郷土会報」第54号

昭和55年1月27日発行

近世初頭の山崎藩（一五）　島田清
史跡鹿沢城跡保存と公園計画について　堀口春夫
源が谷山崎焼　最後の陶工　那波鳳翔
続山崎昭和年譜　堀口春夫
史跡部だより

「山崎郷土会報」第55号

昭和55年5月20日発行

山崎閣斎と山崎（上）　島田清
八木家所蔵高瀬舟文書について
古文書研究グループ

続山崎昭和年譜　堀口春雄
国木田独歩と山崎町の関係　入江静夫
史跡部だより　会費変更のお知らせ

「山崎郷土会報」第56号

昭和55年12月26日発行

近世初頭の山崎藩（一六）　島田清
衣坂叶え地蔵の由来　衣坂地蔵奉賛会
町大年寄志波吉右衛門御用録（控）　堀口春夫
山崎城跡発掘調査
史跡部だより　総会のお知らせ

「山崎郷土会報」第57号

昭和56年6月30日発行

近世初頭の山崎藩（一七）　島田清
「八幡宮」物語り　根岸元彦
疎人氏の句碑建立に憶う　伊藤親保
昭和五十六年度春季研修旅行見聞記　長田重男
事務局だより　伊藤記
編集後記

「山崎郷土会報」第58号

昭和57年1月30日発行

近世初頭の山崎藩（一八）　島田清
「八幡宮」物語り（その二）　根岸元彦
切腹私法　浅田耕三
鉈とり淵　船曳正己
椿の逆杭　船曳正己
史跡部だより
昭和五十六年度秋季研修旅行記　長田重男
事務局だより　編集後記

「山崎郷土会報」第59号

昭和57年5月30日発行

山崎闇斎と山崎（中）　島田清
伝「播磨公弁円の墓」について　岩井忠彦
続群書類従山科家文書より見た長水宇野氏の内紛　藤原すみ
古寺を訪う　安井清介
史跡部だより　事務局だより

「山崎郷土会報」第60号

昭和57年11月30日発行

山崎闇斎と山崎（下）　島田清
宍粟の神々（一）
— 伊和大神と大汝命の重層構造 —　岩井忠彦
都多考　藤原すみ

山崎町内の地名（一）
秋季研修旅行見聞記
事務局だより

入江静夫
長田重男

史跡部だより

宍澤御陣屋堀之内絵図の看板が完成し、山崎小学校紙屋門の塀の前に建設いたしました。絵図には次のような解説をつけていますので、現地においでになり皆様ご覧下さい。

宍澤御陣屋堀之内絵図の説明

この辺一帯が山崎城があり別名を宍佐和城と言っていました。

今から三百七十余年前（元和元年六月）徳川家康の孫に当る松平石見守輝澄が宍粟郡三万八千石をもらって山崎の地に宍粟城を築きました。

寛永八年、赤穂城主であった弟の政綱の死去により佐用郡と赤穂郡の内から三万石を加えられて

旅行・観劇・航空券
すぐお応えいたします
神姫観光
〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68
（神姫バス山崎待合所内）
FAX (0790) 62－7589

表装全般 …古いものを大切に…
表具師 松本永春堂
山崎町鹿沢本通り
TEL. 62－0122

六万八千石となりました。

寛永十五年御家騒動により、同十七年領地没収となり、代って岸和田城より松平周防守、康映が城主となり宍粟郡佐用郡の内の五万石を賜わりました。この城は宍粟と佐用を相和した城であることから城の名を「宍佐和城」と名づけました。

周防守は城地を整え城下の繁栄をはかりましたが、在城十年余りで慶安二年島根県浜田に移りました。

その後には岡山県から池田光政の弟、松平備後守が城主となり宍粟郡の内三万石を賜わりました。

寛文十一年恒元が死去し、その子豊前守政周が後を継ぎましたが延宝五年政周がなくなり養子の数馬がその後を継ぎました。

延宝六年幼君であった数馬も江戸で急逝したので家をつぐ子がなく御家は断絶、領地は一たん幕府の領地となりました。

延宝七年本多肥後守忠英が一万石の城主となり、前の藩主松平数馬の城地に館を造りそれ以来ここを「宍澤城陣屋」と呼びました。その後藩主九代が継続、明治維新となり、明治五年、学制頒布によりこの地がそのまま学校になり、現在の山崎小学校になりました。

この左の門は山崎藩陣屋門（紙屋門）で町指定文化財となっております。左右の土塀と石垣も当時のものが遺っております。

山崎城（宍佐和城）略歴表

城主名	石高	右城期間
松平石見守輝澄	六万八千石	元和元年 —寛永十七年（一六一五年—一六四〇年）
松平周防守康映	五万石	寛永十七年—慶安二年（一六四〇年—一六四九年）
松平備後守恒元	三万石	慶安二年 —寛文十一年（一六四九年—一六七一年）
松平豊前守政周 仝　数馬	三万石	寛文十一年—延宝六年（一六七一年—一六七八年）
本多肥後守忠英 以後藩主九代	一万石	延宝七年　明治四年（一六七八年—一八七一年）

平成元年　二年度　役員

役職名	氏名	住所	電話
名誉会長	安井淳三		
顧問	小畑欽之助		
〃	庄和夫		
〃	壷阪壽		
〃	伊藤親保		
〃	前田連		
〃	福山清一		
会長	堀口春夫		
副会長	久保寅夫		
〃	志水美好		
総務部長	安井清介		
会報部長	大谷司郎		
研修部長	志水美好		
史跡部長	久保寅夫		

役職名	氏名	住所	電話
事務局長	安井清介	出水町	
山崎地区西支部長			
山崎地区東支部長			
城下地区支部長			
戸原地区支部長			
河東地区支部長			
神野地区支部長			
蔦沢地区支部長			
菅野地区支部長			
土万地区支部長			
監事			
〃			

平成元年　二年度 各部構成（総務部は支部長全員）

史跡部部長	研修部部長	会報部部長
久保寅夫	志水美好	大谷司郎

平成元年　二年度 地区幹事

西町	庄能	須賀出石
門前	中広瀬	高所
加生	今宿	中
本町西	山田	神谷三谷
本町東	東鹿沢	岸田矢原野々上
元山崎	中鹿沢	三津
山田町	本鹿沢	五十波
福原町	西鹿沢	田井与位
北魚町	〃	宇野下町上下牧谷
寺町	千本屋御名	東中野
紺屋町	船野元	大谷中野
伊沢町	中井鶴木	上ノ上上ノ下
出水町	春安	木谷市場
富士野	段	青田木塩
鴻ノ町	金谷	高下
旭町	比地	葛根
大才町	川戸	大沢
上寺	宇原	土万山塩
横須	下宇原	

事務局だより

一、春の研修旅行案内を会報に挿入しています。参加ご希望の方は早目にお申し込み下さい。

二、会報No.(73)配布と同時に本年度会費一、〇〇〇円、地区幹事さんにご集金よろしくお願い申し上げます。

（山崎郷土研究会事務局）

山崎町出水町　安井清介宅
TEL　六二一〇一四番